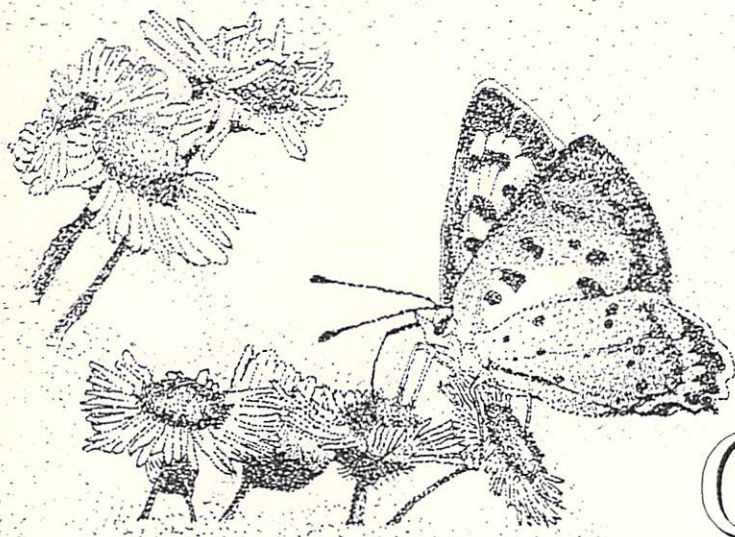


HITOTSUBATAGO NO. 9

ヒトツバタ



9

対馬生物研究会

December 1993

レッドデータブックに見られる

対馬の野生脊椎動物

うらた あきお
浦田 明夫

I. レッドデータブックとは

日本は南北にのびた列島であり、数多くの島嶼から成り立っている。従ってそこに生息する野生動物相は、他の国々に比べて非常に多様性で豊富である。しかし、現在の野生動物相はその豊かさを急速に失いつつある。そこで多様で豊富な生物を保護し、その生息地と共に次代に引き継ぐことは、現代の我々にとって大きな責務である。

種の絶滅を防止するには先ず、その種の現状を知り把握することが必要である。このため IUCN (国際自然保護連合) によって世界の絶滅のおそれのある種の現状を明らかにした資料である。レッドデータブックにより、日本版の野生生物の保護対策資料がまとめられた。

昭和61年より4年間環境庁によって「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」が実施され、

- ① 我が国における絶滅のおそれのある動植物の現状
- ② 本邦産野生動植物の種の現状 (全種の目録と分布)

がとりまとめられている。この結果、脊椎動物だけでも250種、亜種が絶滅のおそれのある種あるいは希少種として選定されている。

II. 種選定の 카테고리区分

日本版レッドデータブックは、種の選定と共に選定種のカテゴリ区分は

基本的には I U C N に準じ、5 つに区分している。

(1) 絶滅種(Extinct)

我が国ではすでに絶滅したと考えられる種または亜種

(2) 絶滅危惧種(Endangered)

保護に留意すべき地域個体群

地域的に独立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

Ⅲ. レッドデータブック選定種とその種数

絶滅のおそれがある野生生物のうち、脊椎動物の種と種数は表のとおりである。

レッドデータブック選定種数

	ほ 乳 類	鳥 類	は 虫 類	両 生 類	淡 水 魚 類
E x	5	1 3 <small>キタキ</small>	0	0	2
E	3 <small>ツシマヤマネコ</small>	2 7	1	2	1 6
V	1 1 <small>チョウセンコジメ ツシマテン</small>	2 7	2	4	6
R	3 6 <small>ツシマクロアカウモリ クチバテンゴウモリ ツシマジカ</small>	6 5	1 3	8	1 7
L p	1 3	0	0	5	7
合計	6 8	1 3 2	1 6	1 9	4 8

E x : 絶滅種

R : 希少種

※表中の数字はレッド

E : 絶滅危惧種

L p : 地域個体群

データブック記載種

V : 危急種

(亜種を含む)の数

哺乳類では68種・亜種選定されているが、対馬産に関するものでは表中に見られる6種が選定されている。

鳥類では132種が選定されているが、このうちキタタキは絶滅種とされているが、これ以外には鳥類には対馬に限って分布するものや固有種はなく、他の地域と共通しているものばかりである。

爬虫類は16種、両生類19種、淡水魚類48種が選定されているが、対馬には該当するものはあがっていない。対馬産の爬虫類ではアムールカナヘビなどいずれかのランクに該当するのではないかと思われるが、選定を受けていない。爬虫類、両生類は西南諸島産のものが、そのほとんどを占めているようである。

Ⅳ レッドデータブックにリストアップされている対馬の哺乳類

レッドデータブックは種の存続に赤信号のついた野生動物をリストアップ、保護に役立てようとするもので対馬の哺乳類では表にみられる6種が選定されている。

(1) 絶滅種

50年以上その生存記録のない種でニホンオオカミなど5種がこれに該当しているが、対馬産では鳥類でキタタキがあげられているだけである。

(2) 絶滅危惧種

「現在知られているすべての個体群の存続が危ぶまれており、生息地のすべてで生息条件が悪化している」という現状が最近の調査で明らかにされているツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ、ニホンカワウソの3種をあげている。

ツシマヤマネコ

〈摘要〉

日本では対馬のみに分布する。本種は純肉食性かつ単独生活者で、対馬の個体群は極めて小さいと推定されているので、生活環境が現在以上に悪化すれば容易に絶滅する恐れがある。

〈学術的意義と価値〉

本種はベンガルヤマネコとスナドリネコの中間の形態を示すとの見解があり、分類学的に貴重なばかりではなく、対馬の個体群は生物地理学的にも価値が高い。

〈生存に関する脅威〉

1902年頃までは対馬に多かったが、本州からの猟犬が移入されたため、たちまち減少したといわれる。自然破壊による食物と巣巢に適した地域の減少、ノイヌの増加、イエネコによる感染症の伝播などが生存に脅威を及ぼすと考えられる。

(3) 危惧種

生息地の大部分が生息条件または生息環境が悪化しており、近い将来絶滅危惧のランクに含まれる可能性が大きいものを挙げ、チョウセンコジネズミは確認記録は少ないものの、生息環境も改変されやすい場所であり、ツシマテンはツシマヤマネコと共に緊急に保護を要する種とされた。

チョウセンコジネズミ

〈摘要〉

ユーラシアの南部に広く分布するコジネズミの一亜種、本亜種は朝鮮半島、対馬に分布し、対馬では河畔や濃耕地周辺などに生息しているため生息環境が改変されやすく、また生息数は比較的少ないため種の保存は安泰とはい

がたい。

ツシマテン

〈摘要〉

朝鮮半島から本州、四国、九州に分布する一亜種、対馬全域に分布し、林地に近い住宅地や林縁部の耕作地に出現するが、基本的な生息地は森林。哺乳類、爬虫類、両生類から昆虫類、甲殻類、植物質のものなど食性は多様である。人口林の増加により良好な生息環境である広葉樹林が減少し、採食路の発達により交通事故死が増加している。

〈学術的意義と価値〉

日本と朝鮮半島の一部の地域のみで生息するテンの分布進化を大陸産のテンとの比較において調査研究をすすめる上で貴重な存在である。また島嶼における種分化の研究材料としても重要である。

〈生存に関する脅威〉

交通事故が多発している。また、多様なエサである動植物をもたらししている広葉樹林のエサ量の減少、多様性の低下となる針葉樹人工林への転換がすすんでいる。採食地としての利用頻度の高い耕作地－林地の縁部が過疎化の進行、耕作地放棄により失われつつある。

(4) 希少種

現在のところ(2)や(3)にも該当しないが、生息条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素を有するもの。

ツシマクロアカコウモリ

〈摘要〉

基産地は巖原町、日本では対馬だけに分布する。低木林から採集され、個体数は少ない。朝鮮半島に生息する同種は洞窟に少ない。

クチバテングコウモリ

〈摘要〉

テングコウモリ、コテングコウモリと異なり、尾膜に毛がない。腫骨に明らかに後葉があり、体色は暗褐色、前二種より光沢がない。基産地は上県町佐護。採集個体は模式標本のみ。南方系種。

ツシマジカ

〈摘要〉

ツシマジカは1976年に本土産と異なるということで別種に分類された。1966年県指定の天然記念物から、1987年に一部地域に限定する地域指定の天然記念物に指定変更された。現在、指定地域外で年間100～325頭が捕獲されているが、島嶼に分布が限定された個体群であり、適切な個体数レベルが維持されるような配慮も必要である。

V 原因解明への対策を

熱帯雨林の破壊など地域規模の環境問題が早急な対策を迫られている中で、毎日一種が滅びていく野生生物の種の減少も重大な課題で、環境庁のレッドデータブック日本版は国際、国内の両面で保護対策に欠かせないものになっている。

脊椎動物では日本産の既知種1243種を調査対象としてほぼ100%を網羅し、そのうち283種を絶滅の恐れのある野生生物として選定している。対馬産は上記の通り6種が選定種となっている。

しかし哺乳類ではツシマクロアカコウモリ、クチバテングコウモリを挙げているのに、ほぼ同格のコウライオオアブラコウモリがもれていたりと、爬虫類ではアムールカナヘビなども含めてもよいのではないかとも思われる。

近いうちに無脊椎動物についてのレッドデータブックがまとまると思うが、日本では対馬特産のものとして、次のものがリストアップされている。

いずれも希少種（R）としてリストアップ

ツシマフトギス、チョウセンケナガニイニイ、ツシマカブリモドキ、キン
オニクワガタ、ツシマウラボシシジミ - 5種 -

なお本文は環境庁編「日本の絶滅の恐れのある野生生物」（1991）より抜
粋したことを明記しておく。

（琴海高校）

むしめがねNo.1 『ヤマネコの給餌活動』

現在、上県町において山村・谷口両会員ががんばっておられます。もうこれ以上待てない、という切実な思いが両会員を給餌活動にかり立てているのではないかと思います。

活動を通してビデオ撮影されたものの中には、ヤマネコの親子の姿やヤマネコとテンとの餌の奪い合い等、学術上においても貴重な資料が得られています。

給餌活動は根気と忍耐が勝負ということですので、私みたいながうたらにはできそうもありません。両会員には健康に十分気をつけていただきたいものです。特に、谷口会員にはお願いします・・・・・・。

庭に蝶を呼ぶ

うらた あきお
浦田明夫

蝶とのかかわり合いをもつようになって、かなりの年月が経つ。かつては野に山に行けば比較的容易に見られたであろう蝶たちも、戦後の急速な開発と植物群落の遷移で少しずつ様相も変わり、蝶相も変遷してきている。九州では対馬にしか分布しない小形のセセリチョウであるホシチャバネセセリは、厳原の砥石淵の上の方から上見坂へ登る旧道、そして上見坂一帯と白岳へ行く途中の草地にはかなり見られていたが、今ではそこらは植林されたり、陽樹が繁り、ホシチャバネセセリの生息にはその条件を満たすことはできなくなってしまっている。

蝶が生息するには環境条件と共に成虫の吸蜜植物（訪花植物）や食餌植物の存在が要素である。

さて、長崎の小高い丘の上に私のささやかな家がある。私は家を建築する時、庭で蝶の自然観察ができればと考えていたが、長崎の地ではそう思うように地球の表面積を手に入れることができないのが現状である。その小さな場所に植林を依頼したところ、庭師は松、梅、サザンカ、ビャクシン、クログネモチ、イヌカヤ、ツゲを植栽してくれた。これでは蝶が来てくれる要素はほとんどない。そこでその後は、自分で好みに応じてサボン、ブッドレア、ヒラドツツジ、ホトトギス、カンアオイ、エビネ類などを植え込み、徐々に庭らしさを整えるようにした。

蝶に来てもらうためには吸蜜花としての訪花植物、そして幼虫の餌となる食餌植物を用意することである。中でもブッドレアは和名をフジウツギとい

い、また蝶の木と言われるほど数多くの蝶が集まることで知られている木で、花も白～紫まで各種そろっており、庭をにぎあわす上にも効果的な植物である。ただ、数年も経つとかなりの大きさに成長するので、毎年せん定し、伸長をおさえる必要がある。また、ツメレンゲやマンネングサの仲間を植えた。これはクロツバメシジミを誘うためのものである。クロツバメシジミは対馬の各地に比較的普通に見られるが、本土では珍しく、環境庁の出しているレッドデータブックによると、ツシマウラボシシジミと共に希少種として取り扱われている種で、長崎県では対馬を除いて、1955年に私が長崎市で発見したものである。当時は九州では大分県に記録があるだけのものであった。ところが、この珍蝶が我が家の庭に訪れたのである。

庭のすみにザボンを植えている。これはザボンの収穫と共に、特にナガサキアゲハを呼ぶためのものである。植えて10年以上経つが、その間少々留守にしていたこともあるが、収穫は1990年2個のみ。花が咲いても結実してくれず、専らアゲハ類の食草として用いるだけに終わっているようである。その他、カノコユリ、オニユリ、オウゴンオニユリ、タカサゴユリ、スカシユリ、ホトトギスなども植えこんでいる。ユリ類にはアゲハ類が飛来し、オニユリとホトトギスにルリタテハが飛来産卵し、庭のユリ類とホトトギスを食草として成育した。

庭の雑草としてカタバミがある。これにヤマトシジミがやって来るし、プランタに植えたパンジーとビオラにはツマグロヒョウモンの幼虫が多数見られ、羽化した。ミカドアゲハのために植木鉢にオガタマを植えたが、成長しないためか目的は達せられないままである。サンショウにはアゲハチョウが産卵した。オオアラセイトウにスジグロシロチョウを期待している。

蝶を呼ぶために植えた植物と
飛来した蝶

〔訪花植物〕	〔飛来した蝶〕
ブッドレア	アカタテハ、ヒメアカタテハ、キタテハ、ミドリヒョウモン、メスグロヒョウモン、ツマグロヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、ヤマトシジミ、ルリシジミキチョウ、モンシロチョウ、アゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハ、ナガサキアゲハ、キアゲハ、アオスジアゲハ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、アオバセセリ、キマダラセセリ、クロセセリ
アベリア	イチモンジセセリ、アゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハ、ツマグロヒョウモン、アカタテハ
ヒラドツツジ	アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、ナガサキアゲハキアゲハ、アオスジアゲハ
カタバミ	ヤマトシジミ
ヒャクニチソウ	アゲハ、ツマグロヒョウモン
ポーチュラカ	キアゲハ、ヤマトシジミ、ルリシジミ
オニユリ	アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ
オウゴンオニユリ	ナガサキアゲハ
タカサゴユリ	
カノコユリ	
コスモス	アゲハ、アカタテハ、ツマグロヒョウモン
ツワブキ	ベニシジミ

[表1-1]

〔食餌植物〕	〔飛来した蝶〕
ザボン	アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、ナガサキアゲハ
サンショウ	アゲハ
オニユリ	ルリタテハ
カノコユリ	ルリタテハ
タカサゴユリ	ルリタテハ
ホトトギス	ルリタテハ
ナガサキマンネン	クロツバメシジミ
カタバミ	ヤマトシジミ
カワラケツメイ	キチョウ
オオアラセイトウ	モンシロチョウ
パンジー	ツマグロヒョウモン
ビオラ	ツマグロヒョウモン
ハボタン	モンシロチョウ
ハツカダイコン	モンシロチョウ

[表1-2]

なぜかヒトツバタゴ（1969年実生の亜高木）の花には蝶の飛来の確認はできていない。

その他目的外？で飛来した蝶たち

ヒメジャノメ

クロヒカゲ

ヒメウラナミジャノメ

小さい庭でも、最初からその目的をもって蝶を呼ぶための庭づくりをすれば、年中かなりの植物を楽しむと共に蝶の訪問を受け、自然の中で飼育観察もでき、すばらしいネイチャーウォッチングの場ともなるのである。昨年（1990）大阪での花博で蝶の野外飼育場があり、（亜）熱帯の蝶が多数放たれており、その中央に糖蜜を入れた容器がおいてあり、これに多数の蝶が群がっていた。庭に植物と共にこうしたものを一つでも用意すれば飛来する蝶の種類や個体数も増すのではないかとも思ったが、他の有害な昆虫も増えるのではないかと考え直してみた。

花と蝶。広い庭である必要はない。蝶を呼べる植物を植えてみよう。きっと自然を満喫できる庭となるだろう。

私の小さな庭に、表に示したような蝶を呼ぶための植物を植えてみた。特に訪花植物としてはブッドレア、草木としてはムシトリナデシコ（実際に私の庭には植え込んでいないが）が最高で万能の花と言えよう。

食餌植物に限られた蝶しか飛来しないが、訪花植物はその範囲が広い。

蝶を呼ぶ庭づくりのポイントは自分の好みの植物であり、蝶の好む花を選び、開化時期を考えて、年間を通じ、いつも何らかの花が咲くように工夫する。そして蝶の固有の食餌植物をうまく取り入れることであろう。〔表Ⅱ〕

蝶には、その生息環境が森林や草原あるいは里や市街地など固有の生息地がある。例えば、前述のホシチャバネセセリは森林の発達しているところには生息できず、またキリシマミドリシジミは、ほとんど標高400m以上のアカガシの林に限られている。従って庭の立地条件にもよるが、私の場合、森林性、草原性の蝶ではなく、広く野や里、それに市街地に見られる蝶が呼べ

飛来した蝶・科別集計 (表Ⅱ)

科	セリチョウ	アゲハチョウ	シロチョウ	タテハチョウ	シジミチョウ	ジャノメチョウ
種名	イチモンジセリ	アゲハ	モンシロチョウ	アカタテハ	ヤマトシジミ	ヒメジャノメ
	チャバネセリ	キアゲハ	キチョウ	ヒメアカタテハ	ルリシジミ	クロヒカゲ
	アオバセリ	クロアゲハ		キタテハ	ベニシジミ	ヒメウラナミジャノメ
	キマダラセリ	モンキアゲハ		ミドリヒョウモン		
	クロセリ	ナガサキアゲハ		メスグロヒョウモン		
	カラスアゲハ		ツマグロヒョウモン			
	アオスジアゲハ		ウラギンスジヒョウモン			
数	5	7	2	7	3	3

る対象となっている。

対馬や長崎では80余種の蝶が記録されているが、このうち迷蝶と呼ばれる有方から気まぐれに飛来する蝶、それに森林性、草原性の蝶を除くと比較的限られた数にしばられ、現在飛来種数は27種となっている。当然飛来するだろうと思われる蝶、例えばツバメシジミなど未記録だし、今後に期待したいが、飛来種数としてはかなりの高率だと思われる。

(琴海高校)

むしめがねNo.2 『豆畝にブッドレアを植えよう!』

どなたか、豆畝に自由にできる土地をお持ちでしたら、是非ブッドレアを植えてください。杉会員がきっと涙を流して喜ばれると思います。

分布を拡大するイシガケチョウ

～対馬に土着できる可能性は？～

さかい 境 よしあき 良朗 ・ すぎ 杉 あきら 憲

1 経緯

対馬でイシガケチョウが初めて採集されたのは、1985年、今から7年前のことである。当時の状況からすれば、この個体は迷蝶か、あるいは迷蝶によって一時的に発生したものではないかと考えられた。^{#1}

・ 1985. IX. 17 上対馬町舟志 1♂ 北脇和光 採集

対馬の蝶類の中で、一見、分布上不可解な欠落種がいる。コムラサキ、ヒメウラナミジャノメ^{#2}、イチモンジチョウなどである。簡単に言えば、これらの種は、何ら分布を阻害する要因がないにもかかわらず、対馬には生息していないのである。多くの研究者が対馬の蝶類の分布について生物地理学的考察を加えてきたが、解決できない問題として今なお残って課題である。イシガケチョウもそのようなものの一種であった。江島(1986)は、本種の対馬に分布しない要因として、主として気象条件のために対馬への進出が阻害されたのではないかと推論している。

境が、「対馬でもイシガケチョウが採れているらしい」という情報を初めて得たのは、10年前の1981年にさかのぼる。当時、豆蔵小学校に勤務されていた松村氏から伺ったところによると、小学生が巖原町の豆蔵(美女塚付近)で本種を採集しており、標本も存在するということであった。迷蝶の可能性も考えられたが、早速この小学生に連絡を取り、状況を詳しく聞いた。しかし「???」要領を得ず、標本も存在しなかった。希望をいだかせたも

の、『やはり、対馬にはイシガケチョウは生息していないのではないか』との結論に結局落ち着いたのであった。

従って、舟志での記録を迷蝶によるものと判断したのは、当然といえば当然のことであった。事実、次の記録がもたらされるまで数年のブランクがあったのである。

1990年夏、杉から境へ興奮の（実際は、興奮しているのだが、あえて冷静を保っているふりをしている）第1報が入った。

「ようちゃん^{#3}。上見坂〔厳原町〕でイシガケチョウを見たよ。初めはモンシロチョウの大きいのに見えたちゃばってん、葉に止まったところを見たらイシガケチョウやった。1頭だけじゃなかったよ。」

「?・・・、!・・・。（驚きの余り声も出ない)」

この時よほど興奮していたらしく、正直言って呂律が回らなくなり、イシガケチョウのことを間違えて、「スミナガシは・・・」などと、全く別の蝶の名前を口走ってしまったりしたのであった。この年の成果については、杉、小宮両氏の報告に詳しく記録されているので、省略する。この年、当地で小規模の発生があったのは疑いようがない。

このような経緯を経て、1990年を境にし、本種が対馬各地で採集、目撃されるようになった。そして、急速に分布を拡大する傾向にあり、しかも、昨年(1991)は越冬を裏づける春期の記録も出た。

このことから、対馬のイシガケチョウについて1つの仮説を立ててみたいと思う。本種はもともと対馬に生息していなかったと考えるのが妥当であろう。過去、散発的に迷蝶として飛来し、一時的に発生することはあったが、

個体を維持するには至らなかった。しかし、1990年に飛来した個体群は、その飛来の時期、気象条件などに恵まれ、食草であるイヌビワの豊富さも手伝って、世代をくり返すことが可能になった。イヌビワは島内の海岸線から内陸部にいたるまでごく普通に広く分布している。ここ数年、対馬は確かに暖冬傾向にあったが、今後、対馬での土着の可能性は十分考えられると思われる。

II. 分布状況

1991年11月現在までに、筆者らが知り得た（公表、未発表を含む）記録をまとめてみた。対馬には毎年島外から多くの採集者が訪れており、この他にも採集あるいは目撃された記録もあるはずである。

採集・目撃年月日	頭数	記録地		記録者	備考
不明				秋田勝巳	対馬で最初の記録 ^{註1}
85. 9 17		上対馬町	舟志	北脇和光	
91. 4. 9	1 ♀	厳原町	豆酸	杉 憲	越冬個体
5. 24	2 exs.	豊玉町	仁位	境 良朗	第1化の個体(初見)
5. 25	1 ex.		"	"	
5. 26	3 exs.		"	"	
8. 7	1 ex.	美津島町	濃部	"	

8. ?	1 ex.	上対馬町	大浦	小宮秀光	
8. 26	1 ex.	峰町	志多賀	境 良朗	
8. 30	1 ♀.	美津島町	太田浜	"	イヌビワで産卵行動
9. 1	1 ♂	酸原町	豆酸	"	
9. 8	1 ex.	豊玉町	糠	"	吸蜜(植物不明)
	1 ex.		佐保	"	
9. 12	1 ex.	上県町	伊奈	小宮秀光	
9. 13	1 ex.	豊玉町	唐洲	境千壽子	
	1 ex.		貝口	"	
	2 exs.	酸原町	豆酸崎	杉 憲	
9. 15	1 ♂		"	境 良朗	湿地で吸水
9. 16	2 exs.		"	"	
9. 21	1 ex.	峰町	志多賀	境 良朗	
	1 ex.	豊玉町	十善寺トソネル	"	
9. 22	1 ex.	酸原町	豆酸	"	
	1 ex.		豆酸崎	"	
9. 23	2 exs.	上県町	伊奈	"	
	3 exs.		伊奈～越高	"	吸蜜(植物不明)
10. 4	2 exs.	峰町	吉田	"	
	1 ex.	豊玉町	仁位	"	
10. 8	3 exs.	峰町	賀佐	小宮秀光	他に数頭目撃
10. 10	2 exs.	上県町	御園	境 良朗	
	7 exs.		志多留～中山	"	

	1 ex.		越高	〃	
10. 12	1 ex.	峰町	志多賀	壽柳喜行	取水
	1 ex.		三根～大久保	〃	
	1 ex.	豊玉町	佐保	境千壽子	
10. 13	2 exs.	峰町	賀佐	境 良朗	
	1 ex.	上県町	大久保～鹿見トンネル	〃	
	2 exs.		御園～越高	〃	
	3 exs.		志多留～中山	〃	
	3 exs.	峰町	賀佐	〃	
10. 21	1 ex.		志多賀	〃	
10. 22	1 ex.	豊玉町	唐洲	境千壽子	
10. 26	1 ex.	峰町	三根	境 良朗	
	1 ex.	豊玉町	糠	境千壽子	
11. 4	数頭		唐洲	〃	
11. 5	数頭		唐洲	〃	
11. 6	4 exs.		唐洲	〃	
12. 16	1 ex.	敵原町	敵原	杉 憲	
12. 18	1 ex.	敵原町	瀬	杉 憲	

註1：1985年以前にも記録があるが、最終年月日を確認できなかった。

註2：本種は恐らく本土の個体が誤って持ち込まれたものと思う。

(小網小学校)

(久田小瀬分校)

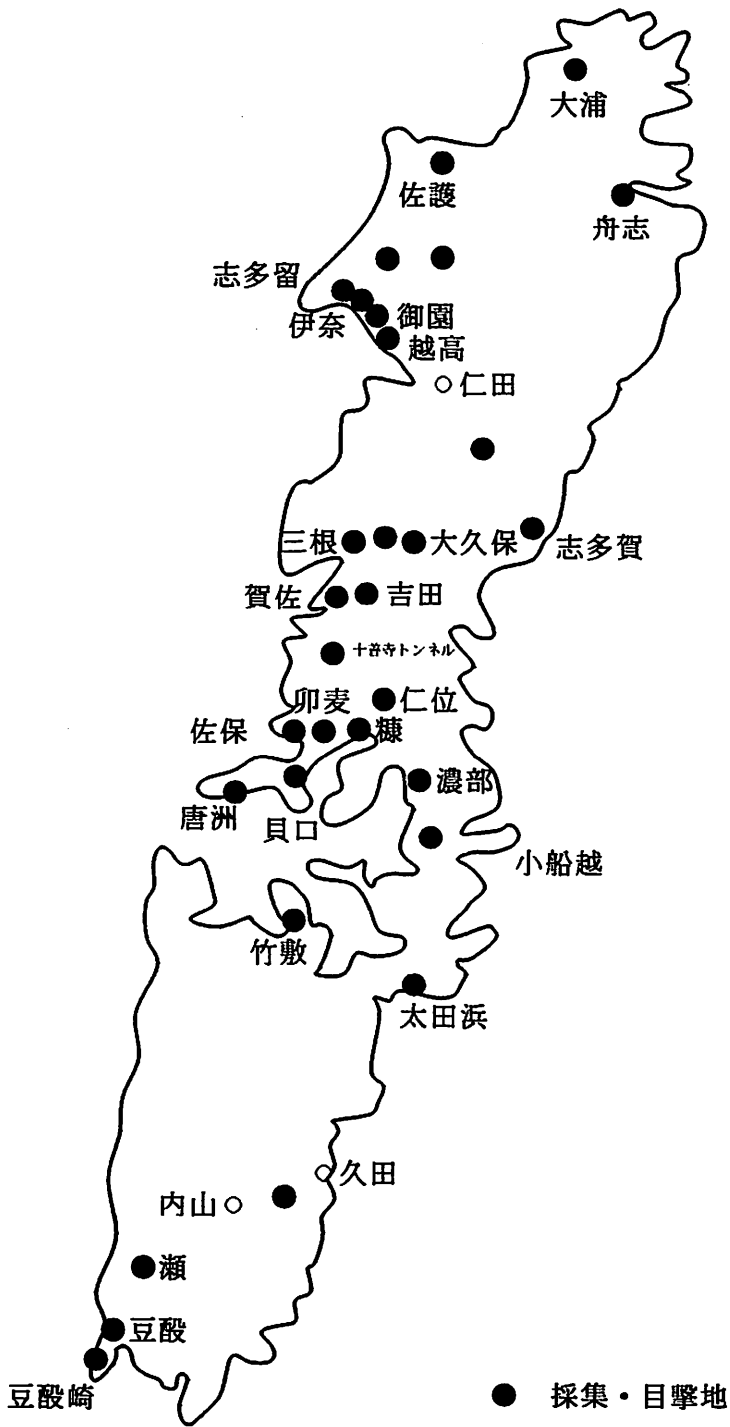


図1 イシガケチヨウの分布図

※ ここまでの本報告は、1991年の冬に書き上げていたものである。従って、タイトルも「土着できるか？」としておいたわけだが、現在（1993）の状況から確実に定着したと考えられる。しかも、対馬のタテハチョウ科では、最も普通に見られる種となった。

分布図も1991年末現在でプロットしているが、今はほぼ全域で確認されているのであまり意味のあるものではない。本種がいかに急速に土着をなし得たかの参考資料として見ていただきたい。

ただ、このような分布の拡大をとげた蝶の中には、5年～10年のスパンでまた突然姿を消す例もあり、今後ともその消長を注意深く見ていく必要は感じている。

むしめがねNo.3 『ビデオで一等賞！』

杉会員が県視連（長崎県視聴覚教育連盟）のビデオ作品部門で、何と何と一等賞にかがやきました。正確には「県教育委員会賞」というのだそうですが、これには、本人が一番びっくりしたということです。去年は、企画賞だったので、2階級の特進。おめでとうございます。

タイトルは『蝶の一生』で、イシガケチョウの一生をテーマとして取り上げています。蝶の変態の各段階で、教育テレビの理科のお兄さんのごとく、杉会員本人が出てきて解説をするのだそうです。その大胆不敵な発想はさすが杉さんだと感心させられます。私は、つつい算数博士の秋山仁さんの姿とダブってしまいました。今年の総会（忘年会）の時に、たぶん披露されると思いますので、お楽しみに・・・・・・・・。

対馬のワシ・タカ類

たにぐちひでき
谷口秀樹

ワシタカ類とは、ワシタカ目に属する鳥類を指しています。これらはワシタカ科とハヤブサ科の2つに分けることができます。

世界中にタカ科の鳥は約220種、ハヤブサ科の鳥は約60種が生息しています。このうち日本にはワシタカ科で22種、ハヤブサ科では7種が記録されています。さらにこのうち、長崎県ではワシタカ科で19種、ハヤブサ科で7種が記録されています。そのうち対馬ではワシタカ科で19種、ハヤブサ科では7種が記録されています。すなわち対馬では、県内で見られるワシタカ類のすべてが記録されていることとなります。

私は、1978年5月に初めて対馬を訪れて以来、ほぼ毎年5月を中心に来島し、観察を続けてきました。また、1990年4月よりは、転勤で当地に赴任して以来、ほぼ2年間にわたり周年の観察を続けています。その中から、特にワシタカ類に限り記録をまとめましたので報告いたします。

前述しましたように対馬では、長崎県内に分布する全てのワシタカ類が記録されています。私は現在までに、ワシ・タカ科で14種、ハヤブサ科では4種の観察をする機会を得ました。

ところで対馬で一番多いワシタカ類はなんでしょうか。その疑問の1つの答えとなるのが、観察日数だと思います。それで見ると、1位トビ、2位ミサゴでいずれも留鳥です。「対馬名物トンビにカラス」という歌の文句もこれで見るとうなずけます。さらに3位ハイタカ、4位チゴハヤブサ、5位ノスリと続きます。これらの順に見られる機会が多いと思われます。

